

---

# 終い天神

YORU

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

終い天神

### 【Nコード】

N7082A

### 【作者名】

YORU

### 【あらすじ】

日本でいえば戦国明治江戸あたりの世界観ですが、あくまで異世界。青年義太郎が大切なものを手に入れていく青春時代です。

## 第一幕 彼の府中入り

七色の紙風船が、風にまかれて飛んでった。

鬼の子、鬼の子

ちようど町町の境界辺りに建つ境内のところで、数人の子供が寄り集まってなにかしている。

秋口のうすら寒い風が通る中、にたにた笑いの子供たちが、一人の少年の背中を蹴った。

やだ、鬼の子、ここに来るな

鬼は鬼の村に帰れ

投げた石が頭にあたり、倒れたところ腹を蹴られた。

多勢に無勢で少年は丸くなって体を守ることしかままならない。

やがて大人がやってきて、子供を連れて去っていく。

鬼の報復がきたらどうする

倒れたままの少年にはだれも寄り付かない。

頭からはあつたかい血が出ている。あざだらけの体を起こして、

少年はよろめいて紙風船を拾いに行った。

あ……

拾いあげたそれは、ぺろりと開いて一枚の紙になってしまっている。

破れてしまってる……

少年のぼんやりとした眩きが、曇天の下で、やけに寂しく響いていた。

「困ったな」

からつとした快晴が頭上に広がる。義太郎ぎたろうは額の汗をぬぐい手元の地図にもう何度目か、目を通した。

もつ三刻は歩いたのにちつとも目当てのお屋敷が見えてこない。

天神府中てんしんぷちゆうは地形がややこしいというのは本当だったのか……」

ほとほと困りきった様子でため息をつき、ついに目に入った茶屋に腰を据えた。

義太郎。年の程は十六、十七。紺の上に袴といったなりで、道中についた汚れが見える。

「お客さん、どうぞ」

店の娘が運んできた茶を、礼を言ってからいつきに飲んだ。冷たい一杯に気持ちちが幾分冷静さを取り戻す。さらに一服を頼んで、ひざの上に地図を広げる。

茶をさしだす娘がそれを見て、

「お客さん、ここに用事？」

と聞いてきた。年が近そうでいかにも人の良さそうな、言い換えるといなか者といった義太郎の雰囲気、娘は気が軽い。

「はい、そうです」

義太郎はちよつと照れて丁寧に戻した。その態度に娘はさらにこの青年に興味をもったようで、彼の地図をのぞいて見る。

「府中には初めてのようですね」

「ええ、だから迷ってしまつて。府中は道が入り組んでいますね」

義太郎は苦笑する。天神府中といえは国の要、つまり大都會である。対して義太郎の故郷は規模は小さく、この都からはるか北にあり、初めて国許を出てきてやつて来たのが府中とは、誰が聞いても驚く所業だった。

「どこに行きなさるの？」

「このお屋敷なんです、わかりますか」

地図の一点を指差して見せると、突如娘の顔色が変わっていく。  
「どうなされた」

慌てた義太郎の前で、娘は口を開けたり閉めたりする。そして一回つばを飲み込んでから、

「それならこの道をまっすぐ行つて……、広い通りに出たらそこを

沿って行かれれば……」

「あ、ありがとう」

それだけ言って娘は逃げるように奥にひっこんでしまった。義太郎が銭を払うときに呼んでみてもいっこうに出てこなかった。

義太郎は娘に教わったとおり歩を進めているが、先刻の娘の態度の変わりようが気にかかって仕方が無い。彼は目指すその屋敷について何も知らされていないからひどく不安になってきてしまった。（いったい、これからおれが向かう所はどういった所なんだ）

一抹の危惧を胸に、しかしわずかに高揚する気持ちをもって、義太郎は目的地へと歩く。

## 第一幕 彼の府中入り（後書き）

覗いて下さって本当にありがとうございます。

感想、意見等残してもらえればまたありがたい！  
精神の栄養になります。

ありがとうございます。

## 第二幕 門前まで

「また、困った……」

大路の端をとぼとぼ歩きながら、義太郎は肩を落とした。

いつこうに着かない。

いくつもあつた細い小路に目もくれず、言いつけ通りに信じてここまで来てみたが、やっぱり見えてこないので心配になってきていた。

人に聞こうにも左手の家並みに、戸を開けて尋ねるのも気が引けてしまう。右手はさつきからずっと塀が続いている。どうやら社寺の類らしかった。

その塀の山門が見えてきた。

まさか都の神社におしかけて道を尋ねることも出来ないから、素通りしようとしたところ、山門から突然走りだしてきた影があつた。

「あ、失礼」

ぶつかるか、と義太郎が身を固めたが、その相手がぎりぎり止まつた。自分より少し低いかというくらいの体格のその人が先にそう言う。

「すみません」

軽く頭を下げた義太郎に、その男はにこつと笑つた。そして口を開く。

「あなた……」

とそこで、相手の彼にわつと数人の子供が寄つてきた。

「お兄ちゃん、逃げたらいかんよう」

「昨日もふらつと消えてしまつて。風揚げの約束忘れてしまつたの？」

「遊ぼうよ、ね」 子供たちは口々に言つて男の裾をひっぱる。

「わかつたわかつた」

男は苦笑して、発しかけていた言葉をやめて、義太郎に会釈をし

た。

「よし、じゃあ私が鬼だ！さあみんな逃げろ！」

男が声を張り上げると、子供たちが嬉しそうにきやあきやあ騒いで散らばった。

同じく楽しそうに走り出そうとする男の背に、義太郎はあわてて声をかける。

「伺いたいことがあるのですが」

「あ、やっぱり」

男は笑顔になる。

「やっぱり？」

義太郎が虚を突かれると、男はこくんと頷いた。

「あなた、道に迷ってらっしゃる」

「そうです。わかりますか」

「最近多いから、この辺は。目指す屋敷は、まだもう少し先に行く」と、ひっこんだ門がある。そこですよ」

何もまだ聞いていないのにすらすらと言われて、義太郎はつまつた。

「あの……」

「大丈夫です。こちら辺で訪問者が来るような所、そこしかないんだから。行ってごらんなさい」

そう言い放つや否や、男はさっさと鬼ごっこに興じにいつてしまった。

義太郎は門の下で、しばらくぽかんとしていた。

「あつた……」

義太郎は、喜びがにじみ出ているようなつぶやきを吐いた。

さっきの男の言った通りであった。

大路より少しひっこんだ門、そこから中を覗けば、故郷では見た



こともない、たいそう立派な様子の御屋敷が庭の向こうにそびえている。

別に飾りが豪華というわけでないが、とにかく土地が広そうに見えた。

地図を広げる。確かに、このように思える。

（しかしそれでどうする、入っていいものかどうか）  
と迷って門前でうろうろ。

意を決し片足を踏み込もうとした時、義太郎は身を翻してさつと後ろの民家の陰に身を潜めていた。

数人の男がこちらに向かって歩いてきていたのだ。

義太郎はしまった、と思う。

どうも人の気配を察すると隠れる癖が自分にはある。

見たところ男どもは例のお屋敷を見上げながら進んでいるので、屋敷の関係者であろうと勘ぐった。

用事があるのに隠れるなど不自然で怪しい態度、気づかれたらなんと説明すれば良いのか。

## 第二幕 門前まで（後書き）

稚拙な文章、読んでいただいております。

### 第三幕 出会いの攻防（前書き）

一応の警告ですが、暴力的で出血のある表現が含まれています。苦  
手な方はご注意を。

### 第三幕 出会いの攻防

その男たちというのは数えてみれば六人の、それぞれ差料を大小  
さした者だった。

刀剣の類といえ、義太郎の故郷では大人の男でもめつたに差し  
たりしないから、ぶっそうだなと眉をひそめた。

「ここか」

「天……」

なにか話す声は耳に届くがはつきりしたところまではわからない。  
男たちは門の中に入りもせず丸くなってやたらとひそひそ話し  
あっている。そんなもんだから義太郎も陰より登場することもでき  
なくて、狭いところからなんとなくその男たちを窺っていた。

不意に男たちの声がぴたと止んだ。代わりにちらりちらりと視  
線を動かしていた。

その目の先を見ると、義太郎が歩いてきた方向からまた一人、誰  
かがやってくる。

（あの人は）

ゆったりした足取りで来るのは、さつき神社の山門前で道を教え  
てくれた、若い男だった。

その彼は六人の男たちの横を素通りして、なんと屋敷の門をくぐ  
っていきこうとする。

屋敷の関係者であつたかと義太郎が驚くよりも早く、

「おい、お前」

一人がその声をかけると同時に、男達は彼をさつと囲んだ。

「満宮御所の者だな」

同じ男が詰め寄るように言った。若い男は顔色も特に変えず対す  
る男の顔を見据えた。

「違つ」

「何！」

「嘘ですよ、何の用です？」

くすつと笑った彼に、男たちは殺気立っている。

「府中を騒がし、狐狸妖怪の類を招きいれる貴様らをか弱き民にかわつて討つ！勝負されたし！」

「勝負？ 困ったな。私は今刀を持っていないくて」

ほら、と腰を見せる。

「取りにいったいいというなら、お相手しましょう」

男達は皆目を合わせると、全員が全員刀を抜いた。

「待て！」

衝動的に、義太郎は叫んで道に飛び出した。何をしようとは思っていない、ただこのままではいけない、止めなければと思った結果だった。

男たちの注意が、瞬間義太郎にそれた。

刹那、若い男が一番近くの人に正面から当て身をくらわせた。

やられた男はもんどりうって倒れる。

同時にその隣の、代表して喋っていた男が壮絶な悲鳴をあげた。

肩口から鮮血を噴水のように吹き上げている。若い彼が当て身の接触時に奪った刀で、男を袈裟斬りにしたのだった。血刀をひっさげた彼は一步下がって間をとり言った。

「さて。……続けるか、どうしようか」

今人を斬ったにしては、いやに落ち着きはらった声音が凄みに拍車をかけている。

男五人たちは斬られた奴を見もせずになつと逃げ出していった。まいった。

義太郎は、呆然としたまま動けない。

「ちよつと、あなた」

声をかけられてようやく我にかえった。若い彼は持っていた濡れ刃の刀を門の内にぱーんと放り投げた後、倒れている男のもとにしゃがんだ。

「この人、まだ助かる」

そう言つて、応急手当で血止めをしてしまふ。所在なさげに立っている義太郎を見上げた。

「中に運ぶから手伝つて」

「は、はい」

やや緊張した動きで、義太郎は足のほうを持ち上げた。

屋敷の者にその男を引き渡したあと、義太郎は一室に通された。

「ここで少し待つていてくれますか、着替えてくるので」

男が部屋を出ていつてから、やっと空気を吸えた気がする。冷静になると、ますます自分の境遇が心配になってきた。

懷からひとつ、秀美な柄の包みを取り出した。中は何か知らない。（おれはただこれを、届けると言われたただなのに）

やっかいなことに関わってしまったのかと、義太郎は不安な心持ちであつた。

「それなんですか？」

はつとすると、襖を開けてさっきの男が立っていた。

全然気配みたいなものを感じとれず驚く義太郎の前に座ると、彼はちよつと居住まいを正した。

「まずは、手伝つてくれてどうもありがとう」

言つて頭を下げた。と思つたら今度はくすくす笑い出していた。

義太郎が困惑していると、

「しかし驚いたなあ」

とからかい声で続ける。

「あんなところから出てくるなんて」

「あれは……」

恥ずかしさのあまり弁解しようとしたが、なんとも言いようが無かつた。

男は笑つのをやめて、少し真面目な顔をした。

「騒動に巻き込んですまなかつた。私は、春昌<sup>はるまひせき</sup>汐子といいますが、あなたは？」

「義太郎です」

「そう、よろしく」

男 汐子は微笑んだ。

よろしくと言われるのもかわっている感じがしたが、義太郎の心中はすっかり穏やかで平素の状態に戻っていた。

「それであなたは何しにここに？」

普通なら始めの質問はそれだろうに、とおかしかった。けど自分は笑うわけにはいかない、つとめて真剣な表情で義太郎は包みを差し出した。

「これをこのお屋敷に届けるように言い付かってやってきたのです」

「私が拝見してもいいものかなあ」

わからないので返事は出来ない。

言っておきながら汐子は躊躇なく包みを開く。

そこには、手紙があつた。

白の紙に筆ですらすらと書いてある。

『天神様』

「これは……」

汐子は、神妙な面持ちでそれを見下ろした。

### 第三幕 出会いの攻防（後書き）

読んで下さりありがとうございます。  
感想意見等も出来たら是非。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7082a/>

---

終い天神

2011年1月16日15時11分発行